

## 「祖母の骨折から思った事」

3年 M.M

私の祖母は87歳で、佐賀県に一人で暮らしています。そんな祖母と連絡を取るために、ある日私の父が電話をかけてみたところつながりませんでした。いつもなら祖母は、着信があった事に気がつくとすぐに折り返してくれるのですが、その日から連絡はありませんでした。心配になりその三日後に再び電話をかけてみたところ、つながったのですが大変な事になっていました。なんと家の階段から落ちてしまい、右足の大腿骨を骨折して動けなくなっていたのです。電話を誰かにかけようとしても、その時に携帯電話を身に付けておらず動けなかったため、丸三日の間飲まず食わずでした。三日目に「このままでは死んでしまう。」と思い、階段下から携帯電話の置いてあるリビングまで腕の力だけで何とか這い、たどり着いたみたいです。もしも自ら動く事を諦めていたら、命を落としてしまっていたかもしれません。

最近が高齢化が進んでいるので、高齢者の一人暮らしも増加傾向にあると言われていきます。更に、高齢者の事故発生場所の75%以上が、住宅内だという統計も出ています。つまり、外に一人であるよりも家に一人である方が危険が多いという事です。だから、高齢者の一人暮らしは危険と隣り合わせと言っても間違いはないでしょう。

けれど、もし何かあれば今は電話があるから大丈夫と安心している人が多いと思います。実際、私もそのように思っていました。しかし、今回の祖母のように家の中では携帯電話を持ち歩くことはあまりないはずですが、だから、高齢者向けに作られた携帯電話に入っている短縮番号を登録していても、携帯電話にブザーのような物がついていても、その時に持っていなければ意味がなくなってしまいます。

では、もし危険な状態になった時にどのようにして自分の状態を伝えたら良いのでしょうか。例えば、倒れたり意識が薄くなってしまった時に、ボタン一つで病院や身内と連絡がとれる軽くて身につけられる物があるといいと思います。今回のように携帯電話は家の中で持ち歩かないのでネックレスや、ブレスレットの様な形であれば自然に携帯出来るのではないのでしょうか。また、そのようなボタンを各部屋に一つずつ、手の届きやすい低い場所に取りつけておくのも良いと思います。

これまで、危険な状態になってしまった時の事を考えてきましたが、何よりもそのような事故が起きないことが一番です。私の祖母の場合は階段でしたが、年を取るに従ってちよつとした段差でも危ないのです。だから、高齢者が一人で暮らしている家などには、段差をスロープなどに変えていかななくてはならないと思います。

「バリアフリー」とは、社会生活をしていく上で障害（バリア）となるものを除去することを意味しますが、このような社会を築くためには私達一人ひとりがもっと高齢者の身になって考えていく事が大切だと思います。先ほど、段差をスロープに変えればいいと言いましたが、この国にあるすべての段差をスロープに変える事などは絶対に出来ません。高齢化が進んでいるので、このような悩みを持つ人はきっと年々増えていくと思います。

でも、今の私達にはそんな方々の支えになることがきっと出来るはずです。困っている人がいたら手を貸すという様な当たり前の事をもう一度見直すきっかけとなりました。

この夏休みに私は、父と一緒に祖母のお見舞いに佐賀県の病院に行きました。少し前までは三日間倒れた後遺症からか、右目が半分しか開かず、物が二重に見えると聞いていましたが、会いに行った時には目も治っており、杖をついて歩けるようにまで回復していました。そんな祖母の姿に安心はしましたが、こんなに色々な物や事が進歩している中、みんなでその身になって、高齢者の為になる事も進歩させていくべきだと今回思いました。